

歴史まちづくりにかける思い 福原淳嗣大館市長

平成 28 年 12 月 20 日 大館市長室にて

福原淳嗣 大館市長

中村博美 大館商工会議所 街の元気づくり委員会委員長

畠山喜満 大館商工会議所 観光振興委員会委員長（大館市観光協会専務理事）

ポイント

- ◎強みを伸ばすには自分たちの強みを知ることが先で、歴史まちづくりでまず自分たちの強みを知り、そこから強みを伸ばすための総合戦略をつくる。
- ◎うれしいのは、何をやりたいかわからないとって始まった歴史まちづくりの取り組み過程で、市民からいろいろ提案してくれるようになったこと。
- ◎一番大事なのは子供たちに大館の良さや偉大な先人がいることなどを教える場をつくっていくこと。私たちは小さい時から大館に歴史的なもの、受け継いでいかないといけないものがあるということを教えられなかった。だから外から聞かれても、何もないよという答えしかできなかった。
- ◎祭りのために1年準備している友人がいる。その人の背中を見て20代の人がある生き方を格好いいと言う。
- ◎大館市役所ではおもてなしに「ホスピタリティ」という言葉は使わない。「シビック・プライド」という言葉を使うようにしている。好きだと伝えたいことがまちづくりの根本ではないか。
- ◎まちづくりは一朝一夕ではできない。30年ないし50年かかるかもしれないが、その間、先人から受け継いだ歴史と文化と伝統を羅針盤にする。

聞き手) 平成 20 年に歴史まちづくり法ができて、今年が 8 年目です。この間 60 近くの市町村で取り組みが進められ、地方自治体にとって魅力あるプロジェクトとなっているように見受けられます。私から見て、これらの取り組みには、二つの特徴を感じています。一点は他の都市計画のプロジェクトに比べて、市長のトップダウンの傾向が強いことです。どのまちでも取り組みの前面に市町村長が出てきていますし、歴史まちづくりサミットもその現れの一つです。もう一点はその逆で、地域の人の参加が積極的になされていることです。これには法律の仕組みとして、歴史的風致維持向上計画を策定する際に地域の人の活動を組み入れていくことが必須で、行政だけではできない仕組みになっていることも背景にあると思います。実際に計画策定の協議会などで伝統産業に従事されている方などと意見交換をしながらプランを練っています。トップダウンの強いリーダーシップの下で、地域の積極的な参加によって進められているというのが、歴史まちづくり計画の特色ではないかと思っています。

そこで、トップダウンの責任者である市長がどのような思いで取り組みを始められたかなどについて、直接そのお考えをお伺いし、その結果を全国の自治体にお伝えしたいと考えました。市長の思いを聞かせていただきたいと思います。



福原淳嗣 大館市長

1. 歴まちに取り組んだ動機

聞き手) なぜ歴史まちづくりに取り組んだのか、その動機をお聞かせください。

市長) もともと私は地方創生がテーマだった。市議会議員のとき、鉱山を用いて環境リサイクルの基地をつくる構想があり、それが秋田県北部エコタウンとして昇華をした体験があり、その時に気づいたのが、地方であっても大きな時代が求める役割や、国が求める役割を果たした時に、地方創生はかなうのだなと感じました。その後明日香法や古都保存法を知る機会があり、明日香村を訪問した時に、日本の歴史の中で律令政治が始まった場所だという物語とまちづくりとを合わせることで、当時の関村長をはじめ明日香村の人たちが誇りをもっていらっしゃるのを見た。私はまちづくり、地方創生は、大館に住んでいる人たちが先人から受け継いだものに、自信と誇りをもって立ち上がった時に始まる、それが本当の意味での地方創生だと感じました。ならば、市の長としてなすべきことは、やはり大館びととしての誇りを、先人から受け継いだ歴史と文化と伝統をまちづくりの羅針盤にすることだと思った。議員秘書時代も森林と文明などについて勉強を続けていたが、その中で「森こそは人類の伽藍」だとか様々な言葉に出会った。そしてこういうものが景観十年、風景百年、風土千年としてのまちづくりの中に入ってくる。食も絡んでくる。畑作と牧畜と稲作と漁労では森林に対する考え方が違う。万葉集の時代から植林ということを得た日本人の心、それが今の地方都市でどのように開花するのかを考えた場合に、明日香法は意義のある法律だと考えた。そしてそのあと景観緑三法ができる瞬間にも立ち会ったので、どのような考え方をもってまちづくりを進めなければならないのかを如実に感じた。そして歴史まちづくり法ができた。そして歴史まちづくりをもって新しい市政を位置付けていきたいと考えたし、実際に取り組んでみて、事務方を横串に突き通し、建設部だけでもできない仕事で、産業部、教育委員会なども初めての取り組みだった。その後、仙北市と横手市も歴史まちづくりの準備を始め、そうするとこれからの大館は、秋田県の中で歴史まちづくりを進める自治体との連携を図りつつ、弘前と県境を越えてネットワークをつくっていくことに責任を持って取り組まなければならない。特に弘前市の葛西市長とは、北東北三県で歴史まちづくりをしているのは、弘前と大館だけであり、二市でできることを広げていこうと話している。歴史まちづくりは、大館びととしてのアイデンティティを深めるだけでなく、深まったアイデンティティをもって他の自治体とつながっていくという政策的な効能がある。そういう意味で地方創生を実現するために、歴まち法の取り組みが必要だと思った。

聞き手) 市長になられて、市の組織との接し方とかに工夫をされていると伺いました。

市長) 去年の5月に市長に就任して、事務方は地方自治分野の最大のテーマであるまち・ひと・しごと創

生総合戦略をどうつくるかという準備に入っていたところに、いきなり新市長が歴史まちづくりをやるぞと言い出した。その時に庁内の検討を進めるのに副市長や部長級が知恵とマンパワーを割いてくれたのが一番大きかった。総合戦略の方は半年遅れるくらいの覚悟で、建設部が基軸で教育委員会と連携して歴史まちづくりに傾注するのを、すべての部がサポートするという体制をつくってくれた。5月に就任して、6月1日に組織が立ち上がり、7月8月で方向性をつかむことができた。その代りその間、総合戦略は一切進まなかった。その点を指摘する市議もいらっしやったが、国土強靱化は弱いところを強くする戦略、総合戦略は強みを伸ばす戦略であり、強みを伸ばすには自分たちの強みを知ることが先で、歴史まちづくりでまず自分たちの強みを知り、そこから強みを伸ばすための総合戦略をつくることで良いのではと考え、判断した。責任をとるのは選挙で信任を得た私の仕事であり、政治家として判断をした。大館市役所として、大館びととしてのアイデンティティ探しでもある。また、そういう方向性を幹部の職員が理解してくれたことが大きかった。

2. 市民・民間との接点

聞き手) 市民の方々との接点を工夫されましたか？

市長) 最初は議会からも市民からも、何をやりたいかわからないという声が大きかった。当時から私が言っているのは、城跡の復元とかを行うのではなく、大館は先人から受け継いだ歴史と文化と伝統があり、それはこの国日本が認めるに値する価値あるものだと納得してもらうのが第一だった。三省庁との第1回目のヒアリングを終えて7月下旬に、大館商工会議所の中田会頭さんたちと弘前へ勉強に行った。そこから経済界の捉え方が徐々に変わっていき、一つ一つ着実にヒアリングを含めて対応させていただいている。国の三省庁の担当官も大館入りしていただき、現地調査で的確な助言をいただいた。今年は特に、歴まちの地区座談会に私も出ました。うれしいのは、何をやりたいかわからないと
いって始まった歴史まちづくりの取り組み過程で、市民からいろいろ提案してくれるようになったこと。一年たって、佐竹家関連だけでなく、その前の浅利家、さらには源頼朝と義経のゆかりまで出てきて、うちにはこういう祭りがあるんだとか、こんなものがあるのだとか、いろいろな話を市長に持ち掛けてくれることが一番うれしい。

聞き手) 眠っていた誇りを、引き出すことができたということですね。

聞き手) では中村さんに伺います。最初の感想はいかがでしたか。

中村) 最初に驚いたのは、文科省と国土交通省が手を組むのが、考えられなかった。私は都市計画事業や開発行為などをやってきたけれど、文科省は事業の抑制要件で仇みたいなものですから。また、最初は、市長が言っている歴史まちづくりの意味が分からなかった。文化財の復元をやる程度かなと思いました。しかし、よくよく考えると、自分たちの誇りを、歴史を見て探っていくということなのかと。私も御成町のまちづくりで20～30年もダメだったものを7年かけて掘り起こした時に、まず御成町のみなさんにこの地域は、明治から続く企業城下町



中村博美 街の元気づくり委員会委員長



で、産業的に言えば大館の中心に近いという誇りを持って頂くところからはじめた。また、商工会議所の青年部できりたんぽ祭りやきりたんぽコンテストをやって、「本場大館きりたんぽ」という名前を売る際に、ポン太やキリ子をつかって、ポン太君に食材を背負わせた。それは、大館の本場きりたんぽは5種類の材料が必ず入っているという他との違い、よそのきりたんぽを邪魔してはいけないけど、大館のアイデンティティはここだということを見せたかった。そうしたら今度は比内地鶏が一躍脚光を浴びて、国

指定天然記念物の比内鶏(ひないどり)、声良鶏(こえよしどり)、秋田県指定天然記念物の金八鶏(きんぱどり)の三鶏の保護と増殖を目的に秋田三鶏記念館が整備された。その時にいろいろな方の話を聞いて、我々も故郷について勉強させてもらいました。そのときアイデンティティをもったということでも民間の立場で広めていくということができたと思います。それが、今の福原市長が進めている歴史まちづくりについてお手伝いしてきた理由の一つかな。それと今度は重要建造物の保存へとつなげること、そして一番大事なのは子供たちに大館の良さや偉大な先人がいることなどを教える場をつくっていくこと。冊子で読ませるかモノで見させるかはこれからですが、低学年の児童から教えていって、最終的には花輪ばやしみたいな大館の祭りに行った子供たちが、また帰ってきて大館ばやしを叩けるとい市民文化をつくっていければいい。空き店舗を利用して大館ばやしの伝承館をつくってくださいと会議所から提案している。いつ観光客が行っても見ることができる、子供たちがいつ行っても太鼓をたたける場所が必要だ。

市長が国土交通省、文部科学省、農林水産省と組んでやろうとしている計画は、非常に魅力的で、これから何が生まれてくるのか楽しみにしている。ただちょっと困っているのは、民間としてどこをどうお手伝いすればよいかが見えてこない点だ。商工会議所として、どうやって参加させていくか、どうやって歴史まちづくりとタイアップしていくかは、まだこれからだと思う。

聞き手) 歴史まちづくりで地域活性化のビジネスモデルがないか研究していますが、最初からビジネス主導では難しく、当初は行政主導型で動き出して入れ物をつくる。そして入れ物をつくっていった段階で民間が入り、それが集まることによって動きが起きて活性化してくるという形ではないかと考えています。

中村) 商業活性化だと、儲けた人が出ないと成功したとは言えない。しかし、今、目指しているのは、大館のアイデンティティをどうやって育てるのか、誇りを持たせるのかということで、人口が少なくなくても、それはだんだん濃密になるわけで、うまくいけば成功する。市にお願いしたいのは、箱モノ行政だけでなく、ソフト的な部分を仕掛けていってほしい。そこに市民が巻き込まれていくようなことが必要だ。

3. 観光につながる市民のプライド

聞き手) 観光の面から見ていかがでしょうか。

畠山) 最初は歴史的風致維持向上計画という言葉が、漢字が並んでいてわからなかった。ここに住んでいるとよそに比べて歴史という観点が薄く、伝統的な建造物は少ないし、それを掘り下げていくのはかなり難しいと思っていた。ただ、市域にそういう資産があることがわかってきたことが大事ではないか。商工会議所で観光振興委員会を立ち上げたときに委員長を勤め色々な提案をしてきた。観光面からみて、歴史は非常に魅力的なコンテンツになりえる。当市の観光協会は、弘前市の観光協会と仲良くして、そこに津軽地域の観光団体、県民局も入って11団体で定期的に会合を開き連携して活性化しようとしている。勉強会も何度もやっているし、相互に訪問し観光案内の勉強もしている。

弘前のコンベンション協会は活発で、財源的にもきっちりとやられている。私たちが弱いのは、スタッフが少なく、財源的に厳しいということで、今のところはイベントの運営が中心で、自分で情報発信をすることが少ないが、弘前は一般の会社と同じような運営をしているし、市の行政ともうまくやっているんで、うらやましいと思っている。

文化財という観点から言われてもピンとこないが、例えば八幡神社が防火訓練をやるときに、幼稚園の生徒も参加しているし消防署も来てニュースになるようなときに、ああこういうのもいいなと思う。私たちは小さい時から大館に歴史的なもの、受け継いでいかないといけないものがあるということを教えられなかった。だから外から聞かれても、何もないよという答えしかできなかった。小さい時からこういうものがあると教えていくと、大きくなったら帰ってくることもあると思う。これがもっと市民に周知されると、将来的に非常にいいコンテンツになるのだろう。

聞き手) 子供は歴史まちづくりのポイントの一つで、例えば山口県の萩市では吉田松陰は松陰先生として小学校からその格言を教えられています。そのおかげで、知らない人でも道ですれ違う時に、小学生がお辞儀をしてくれます。そのくらい文化財と教育が繋がっているところもあります。自分のまちが好きかどうかというのは、そのようなことにかかわってくるのではないのでしょうか。

市長) これからさらに民間との連携が深まるステージになってくることから、お二人の話はありがたいと思って受け止めた。歴史まちづくりは計画の認定を受けるのが目的ではなく、後の展開として、特に祭りや、先人から受け継いだ祭礼のスタイルなどが重要。神明社の祭りのために1年準備している友人がいる。その人の背中を見て20代の人



畠山喜満 観光振興委員会委員長



大館神明社例祭の神事

その生き方を格好いいと言うんですね。それが大館びとのライフスタイル、人生がそういうものなのだ、行政もそれを後押しすることが必要。行政は主役になってはいけないところが、歴史まちづくり法の素晴らしい点だと思う。

畠山) 計画が認定されると、地元は何があるかということが知ろうとする機運が高まると思う。今例えば松峰神社は、名前は聞いたことがあるけど行ったことない人が多数だと思うが、そこを訪ねていく人が増えて知識を得ると、まちに来たインバウンドを含めた観光客に説明できるようになる。それが

おもてなしにつながるのではないかと。そうすると親しく会話もできるようになる。ですから、いろいろなところを訪ねるイベントはいつも満員になる。



大館神明社祭典の出陣式

聞き手) 事前に博物館に行ってきましたら、平城の時代からの活動が記されている。多賀城に本拠地があることも考えると、東北全体で動いている流れの中に大館も存在していることがわかります。ただ、少し博物館の場所が遠いですね。

中村) 富山の「風の盆」のように、街中に祭りを紹介するような施設があるとよいと思う。お祭りがなくても観光客がそこへ行けば、こういうことをやっているのか、またその経緯もわかる。そうすると外の人が見ても、そのまちの人が自分のまちに自信を持っているのが伝わってくる。お店やっている人も自信をもって観光客に接することができる。

畠山) 市民の気質なのかもしれないが、弘前へ行くと市民がまちの自慢をする。運転手でも誰でも。それが大館にはない。へりくだって「なんもねえ」というのが最初なんだ。この計画がきちんとできていくと、街歩きでも市民がアドバイスできるようになればいいと思う。

聞き手) 他の歴史まちづくり都市の例で言えば、今まで30年以上かけていろいろなものを修理し、積み重ねてきたものが、今の段階できれいになっています。弘前の武家屋敷の伝建地区でも同様に、30年前はボロボロだったそうです。

中村) 弘前は子供のころから教えられて、今は自分のまちの自慢をしている。だから大館も30年計画で考えていかないといけない。30年後の人を育て大館を自慢しようと。人口は減ったってしょうがないけど、自慢できるまちなんだぞと、北東北で二番目で、その起爆剤となるまちなんだと思えるようなことを、やってもらいたいと思う。

市長) 市議会での行政報告で「おもてなし」という言葉が出てくる。大館市役所ではおもてなしに「ホスピタリティ」という言葉は使わない。「シビック・プライド」という言葉を使うようにしている。それが先ほどのお二人の話に表されているのがうれしい。要は、好きだと伝えたいことがまちづくりの根本ではないか。まちをつくるということは、そこに尽きると思う。

行政報告でも、シビック・プライドという言葉で統一している。

中村) 商工会議所もその言葉を使うようにしよう。

4. 3Dプラスの広域観光ルートでインバウンド150万人

聞き手) 広域観光ルートの話聞かせてください。どうして仙台から秋田を通して弘前、青森へ抜けている絵になっているのでしょうか。

市長) 今具体的には、函館・大館・角館で函館市長や仙北市長と「だて」つながりの「3D観光」を進めようとしている。国策として東京オリ・パラまでに、東北のインバウンド50万人を3倍の150万人にするという目標があるが、今の東北六県の50万人に匹敵するインバウンドの数字をたたき出しているのが函館で27万人。その函館市長が、東北には北海道にあるものはすでに全てある、かつ東北には北海道にないものがまだまだたくさんある、だから函館は東北と組む、とはっきり言うんです。

逆にもう世界に開かれた玄関口を持っている函館・北海道と東北を繋げることを考えずして、3倍の150万は達成できない。そうなれば、7月に東急グループが中核になり民営化された仙台空港と函館空港と新千歳空港の南北の軸の中に、広域観光周遊ルートで位置付けられるかどうか、勝ち組になるか負け組になるかの境目だと思っている。

函館市長は、アジアの人たちは4泊から5泊で日本に来て、函館も仙台も札幌も1泊の都市で2泊は抑えることができるが、その間の2～3泊を青森でとるか秋田でとるか、それとも岩手でとりますかという話だと具体的に教えてくれました。そうすると角館と函館の共通の悩みは秋田犬のように歩かないことで、角館の武家屋敷の前で秋田犬を連れて歩いてもらってそれに秋田美人を見せたいとか、函館の洋風建築の前で秋田犬を連れて歩くメニューをつくれなかと、そこでつながることになる。

そういうことを通じて政府の目標であるインバウンド150万人を達成し得る政策メニューとしての「3D」になる。そう言っていると鹿角など県北の自治体からも声がかかることになり、今は八峰町の「岩館」など「3Dプラス」として広げている。仙北市も函館市も来年度予算化する。仙北市とは観光だけでなく歴史まちづくりでつながるし、また横手市ともつながる。

横手市は奥州藤原の発祥の地で、終焉の地が大館。そこに中尊寺が出てくるんですが、850年に慈覚大師円仁が中尊寺を建立した2年後に、大館の田代山神社の再建に来た。中央の律令政治が、蝦夷と言われている人々を抑え律令政府に含めるために、様々な手法を用いた場所ということができる。それが終わっ



広域連携による二次アクセス整備への取り組み 「地域への人・物の流れを作る」

「館」つながりで「函館・大館・角館」の3D連携を深め、地域の振興へ

今後の展望

3D連携をさらに深化させるとともに、より広域的な関係自治体との連携を進めることにより、地域への人・物の流れを作る。

陸路・鉄路・空路・航路のパートナーと積極的に連携し、地域への交流人口の増加に加え、関係性人口の増加、物流の増加を図ることにより、陸路・鉄路・空路・航路の基盤整備を加速させ、ソフト・ハードが一体となった地域振興を図る。



パートナー

- 陸路
 - 東北自動車道
 - 秋田自動車道
 - 国道7号線
 - 国道105号線
- 鉄路
 - 北海道東北新幹線
 - 秋田新幹線
 - 奥羽本線
 - 秋田内陸線
- 空路
 - 函館空港
 - 仙台空港
 - 大館能代空港
- 航路
 - 能代港

てから、浅利家が山梨県中央市からくるわけですから、そこもつながる。常陸大宮と佐竹家につながるのと同じ。面白いのはこの自治体も、この話をすると嫌がらないこと。八戸市は安藤昌益でつながる。

市事務局) 前の東京オリンピックの時に、外国人へ見せるために毛越寺庭園と中尊寺の復元を進めたと聞いている。

市長) 積み重ねが重要。平泉の人は50年続けている。だから今の世界文化遺産に位置付けられているし、駅前にこじやれた蕎麦屋さんが立地する今の平泉がある。まちづくりは一朝一夕ではできない。30年ないし50年かかるかもしれないが、その間ぶれない羅針盤が歴史まちづくりだと思っている。先人から受け継いだ歴史と文化と伝統を羅針盤にする。そのためにも国の認定が重要で、この国が私たちのご先祖様の文化と伝統を認めてくれるということが、私たちのレゾン・デートルに、そしてシビック・プライドにつながる。

聞き手) 大学等の協力はありますか。

市長) 秋田職業能力開発短期大学の小笠原先生から大館市のまちづくりに関して、様々なアドバイスをいただいている。先生からは、学生を教える視点から、親子で「歴まち散歩」を考えていただいた。大館はもともと「ふるさとキャリア教育」として、故郷を学び、働いている大人の背中を見るという施策を6年前から進めている。その子たちが今度大学へ行くのだが、私たちの時より神明社の祭典の話などにはるかに詳しくなっており、八幡神社を絵にかいて自慢するようになってきている。市内の小学校のほとんどは函館に（修



矢立小学校の児童が五稜郭でパンフを渡し説明している様子

学旅行で) 行く。大館の自慢をパンフレットにし、それをもって函館で宣伝して、函館市民から感謝状が来たんです。「歴まち散歩」をした子供たちが、まちの魅力を伝えていくきっかけになっていく。子供たちが手作りのパンフレットをもって五稜郭の前で配っているのです。子供たちがシビック・プライドを実践しているのです。

聞き手) どうもありがとうございました。

聞き手 :

舟引敏明 宮城大学事業構想学部教授